

2023 年度秋学期東京学芸大学「日本理解」「多文化共修科目」時間割・授業概要

2023 年 9 月 25 日現在

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
I 8:50- 10:20					日本理解 F/ 多文化共修科目 F 社会 (加藤拓) [N207]
II 10: 30- 12:00					日本理解 D 人文 (千田洋幸) [N402]
III 12: 50- 14:20		多文化共修科目 D 世界の民族と文化 (有澤) [N313]		日本理解 B 教育 (遠座知恵) [S106]	
IV 14: 30- 16:00				日本理解 A/多文化共 修科目 E 教育 (秋庭裕子) [N107]	日本理解 H 芸術 (石井健) [書実Ⅲ教室:西 (W) 5号館 2階]
V 16: 10- 17:40				多文化共修科目 B 多言語社会とコミュ ニケーション (岡智之) [N313]	

- * 「多文化共修科目」は、学部の正規生（主に日本人学生）が履修できるCA科目として同時開講されており、留学生と日本人学生が共に議論しながら、世界の文化や社会の多様性について、学びを深めることを目的としています。
- * 「日本理解」は、留学生のみを対象とした科目で、日本の文化や社会について、留学生同士で議論したり、実技や見学などを行ったりしながら、多角的に学ぶことを目的としています。
- * 「日本理解 A・C・E・G」「多文化共修科目 A・C・E」は春学期に開講されます。（今学期に限り、日本理解 A/多文化共修科目 E は秋学期にも開講します。）
- * 日本理解 F と多文化共修科目 F、日本理解 A と多文化共修科目 E は同じ科目です。

授業科目名	日本理解 A：教育(学部生には多文化共修科目 E として開講されています。)
担当教員	秋庭裕子 (アキバ ヒロコ)
ねらいと目標	本授業では、様々な文化的多様性をもった学生同士が、さまざまなアクティビティやグループワークを通じて、個人の強みやコミュニケーション・スタイルについて探求することを目的とし、自身のコミュニケーションから教育について考えていきます。
内容	本授業では、小講義、グループワーク（もしくはペアワーク）を中心としたアクティビティで構成されています。できる限り、授業期間中にいろんな学生と話をすることで、自分のコミュニケーションのスタイル、グループワークでの自分の持ち味に気づき、今後の学生生活に活かしていきます。学期末には、グループ発表を予定しています。
テキスト	特にありません。Webclass（もしくはTeams）にて配布します。
参考文献	授業内もしくはWebclass（もしくはTeams）で紹介します。
成績評価法	毎回の出席 40%、中間課題レポート（個人）20% グループ発表（グループ）20%、最終レポート（個人）20%
授業スケジュール	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. グループワーク（体験型） 3. 異文化間コミュニケーション理論 I 4. 異文化間コミュニケーション理論 II 5. 異文化間コミュニケーション理論 III 6. アサーティブコミュニケーション I 7. アサーティブコミュニケーション II 8. これまでの復習と次回の準備 9. 海外の学生とオンライン交流セッション I（予定） 10. ケーススタディとディスカッション I（中間レポート提出） 11. ケーススタディとディスカッション II 12. グループ発表① 13. グループ発表② 14. 振り返りとまとめ
授業時間外における学習方法	授業時間外では、グループワークの準備や課題資料を事前に読んで、質問やコメントを考えた上で授業に臨んでください。
授業のキーワード	協同学習、国際交流、コミュニケーション、ディスカッション
受講補足（履修制限など）	日本語での授業ですが、海外の学生とのオンライン交流セッションでは英語となります。
学生へのメッセージ	自分のコミュニケーション・スタイルを知り、今後の学生生活や仕事に活かしたいと思っている方で、授業に主体的に参加する学生を歓迎します。
その他	基本的に授業は教室で行いますが、オンライン交流セッションの際には、教室以外の場所からの参加も検討して進めます。

授業科目名	日本理解B：教育
-------	----------

担当教員	遠座知恵 (えんざ ちえ)
ねらいと目標	歴史的な視点から日本の教育について学び、その特徴に対する理解を深めていきます。
内容	とくに「学校」に注目しながら、日本の教育の特徴について考え・学んでいきます。日本は昔から海外の影響を非常に受けて発展してきた国であり、教育についてもその例外ではありません。この授業では、海外からの影響にも着目しながら、日本でどのような教育が行われてきたのかを紹介していく予定です。
テキスト	とくに用いません。
参考文献	必要に応じて参考文献や映像などを紹介したいと考えています。
成績評価法	コメントペーパーや授業での発言内容 (50%)、学期末論述試験 (ワープロ使用可・50%) で評価を行います。
授業スケジュール	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 近世の教育1 (文字社会の成立) 3. 近世の教育2 (手習いの教育) 4. 近世の教育3 (学問の教育) 5. 近世の教育4 (前近代の教育原理) 6. 近代の教育1 (近代教育制度の特質) 7. 近代の教育2 (西洋近代教育法の受容) 8. 近代の教育3 (幼稚園と幼保二元化問題の成立) 9. 近代の教育4 (義務教育制度の成立と教育の国家統制) 10. 近代の教育5 (海外の学校改革運動と大正新教育) 11. 現代の教育1 (戦後の教育改革) 12. 現代の教育2 (近年の教育改革) 13. 現代の教育3 (近年の教育問題と教師の課題) 14. 授業の総括
授業時間外における学習方法	
授業のキーワード	
受講補足 (履修制限など)	
学生へのメッセージ	海外の影響や比較的な視点を交えながら日本の教育をとらえていく授業なので、受講者の皆さんも自国の教育と比べてみてください。
その他	授業は基本的に対面で実施しますが、必要に応じて遠隔授業を一部取り入れる可能性があります。講義だけでなく、映像の視聴、グループワークや作品制作などを取り入れて進めていきたいと思っています。

授業科目名	日本理解D：人文
担当教員	千田洋幸 (ちだ ひろゆき)
ねらいと目標	主に 1990 年代以後のアニメを中心とするポップカルチャーを取り上げながら、日本の文化・社会のあり方について考察していきます。
内容	前半は、ここ 20～30 年ほどの定番アニメ作品を取り上げ、その思想的系譜をたどっていきます。後半は、ポップカルチャーについて考える際に欠かせない「キャラクター」「腐女子文化」「2.5 次元文化」「アイドル文化」等について考えます。
テキスト	全て教員の方で用意します。
参考文献	授業時に指示します。
成績評価法	平常点 50% 最終試験 50%
授業スケジュール	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 1990 年代のアニメ作品① (『美少女戦士セーラームーン』など) 3. 1990 年代のアニメ作品② (『新世紀エヴァンゲリオン』など) 4. 2000 年代のアニメ作品① (『涼宮ハルヒの憂鬱』など) 5. 2000 年代のアニメ作品② (『けいおん!』など) 6. 2010 年代のアニメ作品 (『魔法少女まどか☆マギカ』など) 7. 2020 年代のアニメ作品 (『鬼滅の刃』など) 8. 京都アニメーションが切り拓いた世界 (『響け! ユーフォニアム』『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』など) 9. 美少年の文化 (『Free!』『ユーリ!!! on ICE』など) 10. 新海誠の世界 (『ほしのこえ』『天気の子』など) 11. 災害とポップカルチャー (『シン・ゴジラ』『君の名は。』など) 12. アニメの中のアイドル (『ラブライブ!』など) 13. 日本のアイドル文化 (AKB48、欅坂 46 など) 14. 試験
授業時間外における学習方法	開講前に、『美少女戦士セーラームーン』『新世紀エヴァンゲリオン』『涼宮ハルヒの憂鬱』『魔法少女まどか☆マギカ』『ラブライブ!』等の著名なアニメ作品に多く触れておくと、授業にスムーズに参加できます。
授業のキーワード	
受講補足 (履修制限など)	授業時に出席を確認します。
学生へのメッセージ	
その他	

授業科目名	日本理解 F：社会（学部生には多文化共修科目 F として開講されています）
担当教員	加藤 拓（かとう たく）
ねらいと目標	日本社会を、商業、とりわけ小売業、サービス業がどのように流通網を築いているかという観点でとらえる視点を養うことを目的とする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の商業環境やその現代史を概観しつつ、日本市場の特性、大手小売業・専門店・サービス業の出店判断の考え方を概説する。 ・関連する企業や法律、規制、土地利用計画、時事的な問題などを随時紹介する。
テキスト	特に使用しない。資料等を随時配布、共有します。
参考文献	随時紹介します。
成績評価法	参加人数によるが、①平常点（出席点）、②商業施設、関連企業などのレポート、日本人学生と留学生のグループでのプレゼンテーションを予定しています。（暗記が必要な試験は行いません）
授業スケジュール	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、日本の地理的特徴と商業地 2. 日本の商業環境の変遷①1970年～2000年 3. 日本の商業環境の変遷②2001年～2020年 4. 大型商業施設を運営する企業とその店舗網、日本の土地利用計画 5. テナント企業とその店舗網（ドラッグストア、スーパーマーケットほか） 6. テナント企業とその店舗網（専門店・外食産業） 7. テナント企業とその店舗網（サービス・リテラー） 8. 商業施設の建設計画、法的規制ほか 9. プレゼンテーションの説明・調査① 10. プレゼンテーションの説明・調査② 11. プレゼンテーション① 12. プレゼンテーション① 13. プレゼンテーション② 14. プレゼンテーション②～総括
授業時間外における学習方法	オンラインで確認できる地図、大手小売業の店舗のウェブサイトにあるフロアガイド、小売業・サービス業の企業ウェブサイトにある店舗検索などを授業で紹介する観点に基づいて観察・確認することを行ってください。
授業のキーワード	日本商業、小売業・サービス業、出店、立地、消費行動、法的規制など
受講補足（履修制限など）	特に設けません。可能であれば各自のPCを持参してください。
学生へのメッセージ	
その他	

授業科目名	日本理解H：芸術
担当教員	石井 健 (いしいたけし) tishii@u-gakugei.ac.jp
ねらいと目標	この授業科目では、書を中心とした日本の文字文化について考察していきます。本年度は、実際に墨をすり、筆で書くといった書の実技を取り交ぜながら、書や文字に関わる歴史や文化について幅広く学んでいきます。
内容	日本語と、母国語や日常生活で使用している言語で用いる文字の歴史や特徴、教育の方法の違いについて知った上で、書の歴史や筆記具の種類や製法について学び、現代日本における「手書き文字」や「筆文字」、「芸術としての書」の意義について考えていきます。
テキスト	特に用いません。必要に応じ、資料を配布します。
参考文献	『書の古典と理論』（光村図書出版） 『書の見方 日本の美と心を読む』（角川学芸出版） 『別冊太陽 日本のこころ 191 日本の書 古代から江戸時代まで』（平凡社）
成績評価法	平常点 50% 提出物 30% レポート 20%
授業スケジュール	1 オリエンテーション 2 手書き文字とフォント 3 日本における文字と書の教育 4 伝統的な書の道具①（筆、墨） 5 伝統的な書の道具②（硯、紙） 6 書の歴史と表現／中国の漢字① 7 書の歴史と表現／中国の漢字② 8 書の歴史と表現／日本の仮名① 9 書の歴史と表現／日本の仮名② 10 現代日本における芸術としての書① 11 現代日本における芸術としての書② 12 現代日本における芸術としての書③ 13 現代社会における「手書き文字」や「筆文字」の意義① 14 現代社会における「手書き文字」や「筆文字」の意義②／まとめ
授業時間外における学習方法	博物館や美術館に展示されている書の作品をインターネットでの閲覧も含めできるだけ多く鑑賞するようにしてください。また、日常生活のなかで見かける「手書き文字」や「筆文字」にも注目してみてください。
授業のキーワード	書 書道 文字文化 毛筆
受講補足（履修制限など）	授業は日本語のみでおこないます。
学生へのメッセージ	日本には様々な芸術がありますが、そのなかの「書」を中心に上げる授業です。皆さんがこれまで使ってきた文字や日本の書や文字文化について理解を深めていきましょう。
その他	

授業科目名	多文化共修科目 B：多言語社会とコミュニケーション
-------	----------------------------------

担当教員	岡 智之 (おか ともゆき) okatom@u-gakugei.ac.jp
ねらいと目標	多文化共修科目は、日本人学生と留学生をはじめとする様々な文化的背景を持つ学生が、お互いに学び交流しながら、新しい気づきを生み出す場です。多文化共修科目 B「多言語社会とコミュニケーション」では、多言語多文化社会に関する理解を深めるとともに、多様な文化背景を持つ学生の議論や協働学習を通して、多種多様な人々と対等にコミュニケーションを取ることができる能力を高めることを目的とします。
内容	本授業では、多言語主義、複言語主義のもとで、様々な在日外国人の言語、琉球諸語やアイヌ語、日本手話といった国内での少数言語なども含め、なかなか触れることのできない言語について体験したり、世界各地から来た留学生や日本の様々な地方出身の学生の言葉をお互いに学びあうこともやります。後半は、多言語社会に関する様々な課題をテーマにして、グループごとにプロジェクトを作り、最終発表を行います。ブラジル人学校との交流、朝鮮学校公開授業見学、ヒューマンライブラリーなどの課外活動を計画しています。
テキスト	特に定めません。
参考文献	有田佳代子他編著『多文化社会で多様性を考えるワークショップ』研究社、2018。その他、適宜、授業時に指示します。
成績評価法	平常点 30% (毎回コメントを WEBCLASS に提出)、個人発表 15%、最終発表 20%、最終レポート 30%、課外活動+感想文提出 5%+ α 、最終レポートは A4 用紙 3 枚程度、締め切りは 2 月 8 日 (木) Webclass に提出。
授業スケジュール	1. オリエンテーション、2. 移民の言語使用と母語教育、3. 多言語主義・複言語主義と言語教育、4. ゲストレクチャー事前学習、5. ろう文化と手話 (ゲストレクチャー)、6. 琉球諸語と琉球文化 (ゲストレクチャー)、7. アイヌ語とアイヌ文化 (ゲストレクチャー)、8. 前半振り返りとプロジェクト構想、9~11. 留学生の言語 (日本の方言) を学ぶ (個別発表)、12-14. 最終発表 (グループ発表)、振り返りと全体まとめ
授業時間外における学習方法	課外活動の参加と感想文の提出はセットです。後半のプロジェクト構想と発表に向け、授業外でグループが集まって、調査、準備が必要になります。
授業のキーワード	多言語主義、複言語主義、協働学習、琉球語、アイヌ語、日本手話
受講補足 (履修制限など)	留学生は、プレースメントテストで、レベル 1 とレベル 2 の学生のみを対象とします。一部レベル 3 の判定がある留学生は相談してください。
学生へのメッセージ	言語に対する好奇心を湧き立たせてください。日本人学生と交流したい留学生の積極的な参加を求めます。
その他	

授業科目名	多文化共修科目 D : 世界の民族と文化
-------	----------------------

担当教員	有澤 知乃 (ありさわ・しの) arisawa@u-gakugei.ac.jp
ねらいと目標	さまざまな国や地域出身(しゅっしん)の学生が学び合い、世界の民族とその文化に対して多様(たよう)な視点(してん)から考察(こうさつ)できる力を身につけます。主に、音楽、舞踊(ぶよう)、宗教儀礼(しゅうきょうぎらい)といった表現芸術(ひょうげんげいじゆつ)の事例を中心に、それぞれの文化の背景にある歴史や社会についても視野(しや)を広げていきます。
内容	<p>1. 演習:各自(かくじ)が自国や関心のある国の文化について調べたことを持ち寄って議論(ぎろん)を深めます。さらに歌や絵の制作(せいさく)など、クリエイティブな共同活動(きょうどうかつどう)を通じて互いの文化へのより深い理解を図(はか)ります。</p> <p>2. ワークショップ:ゲストスピーカーを招いて彼らの話や歌・音楽のパフォーマンスを体験し、文化の継承(けいしょう)についても考察を深めます。</p> <p>3. グループ活動:各グループが特定のテーマを選び、伝統をベースに新しい文化を創造(そうぞう)するプロジェクトに取り組みます。例として、世界の楽器からインスピレーションを受けたオリジナル楽器の考案(こうあん)や、異なる国の民話に基(もと)づく現代の価値観(かちかん)を取り入れた新しい物語の創作など、伝統の変化・進化のありかたを体験的(たいいけんてき)に学びます。</p>
テキスト	特に定めません。
参考文献	授業の進捗状況に応じて紹介します。
成績評価法	毎回の授業準備と振り返りレポート 100%
授業スケジュール (暫定スケジュール)	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 【演習】世界の遊び歌 3. 【演習】世界の愛の歌 4. 【ワークショップ】イスラム教の祈り 5. 【演習】宗教の儀礼・音楽 6. 【ワークショップ】アイヌ民族のこぼ・音楽・踊り 7. 【見学】イスラム教モスク(東京 Camii) *土・日・祝に実施予定 8. 【演習】世界の先住民族の文化 9. 【ワークショップ】バラライカの文化と音楽の変遷 10. 【グループ活動】発表の準備 11. 【グループ活動】発表の準備 12. 【グループ活動】発表 13. 【グループ活動】発表 14. まとめ
授業時間外における 学習方法	インターネットや書籍を利用して様々な国や地域の文化芸術について調べる
授業のキーワード	民族、音楽、舞踊、宗教、儀礼、表現芸術、伝統・進化
受講補足(履修制限 など)	留学生は原則として日本語プレースメントテストでレベル1または2のみ受講を認めます。レベル3でも会話能力が高ければ参加できることもありますので担当教員に相談してください。
学生へのメッセージ	他者の文化に触れることで自らの文化も新しい視点でとらえるきっかけとしてください。授業を通じて日本の学生とも交流を深めましょう。
その他	